

「ゴキブリ」のパレード

——岡井隆『土地よ、痛みを負え』論

一、はじめに

岡井隆『土地よ、痛みを負え』は、日米安全保障条約改定反対闘争の収束後、一九六一年二月に刊行された。一九五六年から一九六〇年にかけて発表された短歌連作からなる本歌集は、岡井にとって二冊目の個人歌集にあたる。収録作のほとんどは雑誌「短歌」及び「短歌研究」に発表されたもので、当時、雑誌メディアで精力的な活動を展開していた岡井の話題作・問題作とされた作品を含む十八篇の連作（全三八八首）が収められている。また、本歌集は、いわゆる前衛短歌運動において岡井の先行者と考えられる塚本邦雄の第四歌集『水銀傳説』と同時に白玉書房から刊行されたものでもある。塚本がランボーとヴェルレーヌを主役に主題制作を試みた『水銀傳説』が失敗作であったと位置づけられてきたのとは対照的に、本歌集は岡井隆の表現史においてはもとより、前衛短歌表現史／歌壇史においても象徴的な地位を与えられているといつてよい。

瀬口真司

ただし、その内容は当初から高く評価されてきたわけではない。本歌集への批評は主に、岡井が同時代の政治状況をいかに作品化したのかという点と、それに関わってどのような手法を用いたのかという点に集中して蓄積してきた。とくに、収録作の中でも発表時期の早い「ナシヨナリストの生誕」・「思想兵の手記」における主題制作や、最も遅く発表された「天の炎」・「勝ちて還れ」における安保闘争に対するスタンスについて、それぞれの発表当時に、岡井自身の思想・態度を問うきびしい批判が提出されている。のちに評価が転換し、再び注目されるようになることについては、『岡井隆歌集』（思潮社、一九七二年）が画期をなした。当時までの岡井の歌業を総括するこの事実上の全歌集刊行の背景には、一九七〇年に北里研究所附属病院医局長の職を辞し、東京を離れ、歌作を停止した岡井の行動がある。間接的にはあるが、生活者・岡井の選択が作品の評価を回顧的に好転させたこと¹については留意すべきだろう。

個人史の軌跡と連続性は一冊の歌集の内においても重要である。歌集が作品を格納するとき、一首／一篇は単体の作品である

ときとは別のコンテクストのなかに位置づけられているからだ。ただし、そのコンテクストは批判的に検討されなければならない。

渤海のかなた瀕死の白鳥を呼び出しており電話口まで

巻頭歌について山田富士郎は、「渤海のかなた」の射程にブダペストやモスクワをも設定できることを説きつつ、「瀕死の白鳥」は「フルシチョフによって公表されたスターリンの恐怖政治、ハンガリー動乱によって明らかになった革命の理想の死——民衆、自由、平和の危機と広く取り、その中に中国革命の行方への危機も含まれると考えた方がよいようにおもふ」と述べた。^②山田が行っているのは同時代状況のみならず歌集のコンテクストをも利用した解釈である。ここには巻頭連作「運河の声」に続く「アジアの祈り」が具体的にブダペストを指示していることが参照されているはずだからだ。同じように山田は歌集中盤から最終盤にかけての歌を用いて「岡井の政治的立場は移り、それにつれて作風も変化する。一言でいえば生活の厚みから理念を見るのである」と述べ、これを「思想詩人としての成長」と定義した。このとき歌集内部のコンテクストは作者の思想の変遷に限定され、歌集は総体として成長する岡井隆を表象するものとして扱われている。歌集は、ある作品群の背後に統一的な主体を想定させる装置だ。とくに本歌集は、ばらばらの手法で制作され、発表時期にも幅のある複数の作品が岡井隆の名によって連続性を担保されている。作品に作者の思想が表れているとすれば、編年体のようにみえる本歌集の作品配列に岡井の思想の変遷を読み取ることは容易だ。

しかし、そうした読み取りが可能であるとして、思想の変遷というコンテクストを用意できるのは、すでに成長した岡井隆自身である。山田の解釈は一九六一年の岡井隆に誘導されているのではないだろうか。思想の変遷というコンテクストを相対化するため、本論は歌集を編集した統一的主体を作者とは区別し、仮に配列主体としての岡井隆と呼ぶ。

また、本歌集あとがきで岡井は、「短歌を作るとは、歌言葉に翻訳することである」という「短歌翻訳説」を述べている。^③これを敷衍すれば、作品から読み取れる思想はすでに「翻訳」されたものであるはずだ。多くの先行批評が、本歌集における作者の思想やその変遷を問題化してきたが、そこでのような「歌言葉」が準備されているのかということは十分に論じられていない。

作者の思想の変遷が注目されやすいのは、ある時期からある時期までの作品をまとめて収めた歌集が、その発表単位である連作の枠組みを自明視させていることによる。

江田浩司は、とくに「ナシヨナリストの生誕」、「思想兵の手記」について、「短歌の連作によって、自由詩の表現世界に対峙する創造性を志向している」と評価した。^④たしかに、歌集中で〈詩人の首われの机上に飾られて久し われらの倦怠も久し〉（詩人の首）と書かれるような激しい詩／詩人への対抗意識は、前衛短歌のプレイヤーとされる人物たちが抱えた重要な問題意識のひとつだといえるだろう。しかし、比較的まとまった歌数の連作に歌集の、または当該時期の岡井の表現性を代表させるような評価のありかたは、歌集を考察対象とする際には問題である。

江田は「歴史的な評価から、この歌集が内在する可能性の中心

が何であるかということは、未だ問われているとは言い難い^⑥と述べているが、そうであればこそ、単なる短歌のコレクションやアーカイヴであることを越えて一冊の歌集にどのような可能性が立ちあがっているのかを明らかにする必要があるのではないかと。

ただし、問題は先に触れたような編集操作とその意図を明らかにすることにとどまらない。歌集としての可能性を検討することは、連作の枠組みや歌集における作者の思想の変遷を自明視する読解から身を引きはがし、歌集という装置が——ときには作者／配列主体の意図や連作の主題を裏切つて——形成している隠喩の体系を示すことでもある。

本論はそれに際して特筆すべきモチーフに、「ゴキブリ」があると考える。「ゴキブリ」は巻頭から三番目の連作「ゴキブリの祭り」五首と、巻末の連作「勝ちて還れ」の「2 城」と題された五首で集中的に用いられており、「蛾」や「甲虫」、「鞘翅類」といった歌集中に出現する他の昆虫類とは異なる位相にあると考えられる。

これらの作品群は従来議論の対象となつてこなかったが、「ゴキブリ」は歌集における作品の配置を問題化する横断的読解の可能性を示唆するモチーフである。「ゴキブリ」に注目することで、これまで一義的に読みとられ、岡井隆の個人史に還元されてきた歌集を編み換えることが可能になる。

次節以降では、歌集における配列主体・岡井隆の仕事ぶりを検討するための前提を確認し、そのちに歌集巻頭から「ナシヨナリストの生誕」・「思想兵の手記」に至るコンテクストの検討を行う。

具体的には「ナシヨナリストの生誕」「思想兵の手記」という問題作に至る「運河の聲」「アジアの祈り」「ゴキブリの祭り」「朝鮮人居住区にて」の各作が歌集前半においていかなるコンテクストを構成しているのかということを検討したい。

二、「ナシヨナリズムの問題」の手前

「ナシヨナリストの生誕」（「短歌」一九五七年一月号）「思想兵の手記」（「短歌研究」一九五七年一月号）は、同時に発表されていることを踏まえて相補的なテクストとして読まれる傾向にある。

〈もつとも近き黄大陸を父として俺は生まれた朱に母を染め〉や〈つややかに思想に向きて開きさるまだおさなくて燃え易き耳〉など、隠喩を用い、戦後日本におけるナシヨナリズムを神話的な構図で擬人化した「ナシヨナリストの生誕」は、従来の短歌における私性を拡張する前衛短歌＝主題制作の代表例とされる。

一方で、そうした物語的な構図を取り出しにくいがゆえに隠喩の難解さを指摘されてきた「思想兵の手記」において、「市民兵」に對置される「思想兵」とは、一九五六年一〇月のハンガリー動乱に反応した岡井自身の自己規定であるとして解釈されてきた。

菱川善夫は前者について「言葉のすべてが比喩で、意味は実現された世界と独立してあるから、言葉をひとつひとつ別な意味に翻訳しなければならない」という面倒くさい観念作業で読者に強いられる。（中略）而も言葉の組織化の不統一は一層読者を混乱におとし入れる。」と述べ、根幹となつている比喩の破綻を指摘し

た。^⑧これを踏まえて黒住嘉輝は「イメージの破綻は、単に技術的なものにとどまらないのではないか」と述べ、連作の末尾において、「つぎつぎと大陸に立ち上りゆく諸聲^{もろこえ}とおき我が揺籃期」と暗示される「ナシヨナリスト」の未来が樂觀的なものであるという点に、岡井自身の「思想のよろさ」を透かし見ている。

連作を単体で評価するかぎり菱川や黒住の批評は妥当である。後続の批評もこれらの立場を踏襲してきた。しかし、歌集が新たに立ち上げているコンテキストにおいてこうした評価は揺らがざるを得ない。本歌集収録作には、雑誌初出から歌集刊行までに最大で四年のブランクがある。煩雑になるため詳述を避けるが、本歌集には初出から改作されている歌や、異同のある連作が多数存在する。^⑩

しかし、菱川や黒住は岡井の動機までをも否定する者ではない。彼らはむしろ、ナシヨナリズムを作品の主題に据え、格闘しようとする意欲は積極的に評価していた。黒住は竹内好の「近代主義と民族の問題」を引きながら、日本のナシヨナリズムと短歌の伝統的抒情に対して（アンチ・テーゼを提出するにとどまっている塚本邦雄とは異なつて）ジン・テーゼを志向する岡井の姿勢を重要視する。ただし黒住はその達成を「思想兵の手記」において発掘された、伝統と対決する「短歌ではない短歌」の「新しい抒情の質」に限定していた。黒住が批判した岡井の「思想のよろさ」とは、あくまで作品の背後にある岡井のナシヨナリズム観である。

既述したように本論は作者の思想の読解を目的とせず、歌集という装置が「歌言葉」をコンテキスト化する運動を考察対象とする。しかしながら、歌集において提示されたナシヨナリズムの表

象がいかなるものであったのかと問うことは外すことができない。

とくに「ナシヨナリストの生誕」「思想兵の手記」と合わせて三作同時に発表されているにもかかわらず注目される機会の少ない「朝鮮人居住区にて」（初出：『新日本文学』一九五七年一月号）を取り上げたい。黒住は本作の歌について「ナシヨナリズムの問題を扱つてゆく彼が当然ぶつからなくてはならぬことがある。かつての侵略的ナシヨナリズムの問題だ。勿論彼は取り組む。だがやや弱い」と評したほか、吉本隆明が否定的に、北川透が肯定的に言及しているが、いずれも具体的な分析に欠けており批評が蓄積しているとはいえないがたい連作である。^⑫

ここでは、この連作が歌集ブレテキスト「戦後博物誌」以降いくつかの箇所^⑪に手を加えられてきたことを確認しておきたい。以下は歌集における連作「朝鮮人居住区にて」七首である。

百坪の母國で老婆が死んでいるその四肢（運命）の諺文^{オナモン}を模し

とじのこすうすい流浪の唇は言うかとも見える（平壤^{ピョンヤン}で死にたかつた！）

その高い腹部のうちに腐りきる（日本臣民）（内鮮一如）
にんにく・牛^{ぎゅう}の胃^いをうる灯が見えてここから俺は身構える、
何故^{なぜ}？

軍靴^{ぐんか}のかげからさげすんで来た過去もてば死に添いてまつ曉^{あけ}
の遠さよ

おれたちに革命を賣^{ドム}る同士陳^{チン}よこういうさりげない死から出

直そう

日本の裏戸口 その母國語の眞冬の朝をあふれゆく聲

歌集では繰り返し医師としての主体像／岡井隆イメーが提示される。それを踏まえれば、ここには「老婆」の死亡確認のために招聘された医師の姿を読むことができるだろう。本作は歌集で「ナシヨナリストの生誕」の直前に配置される。この配置もまた「戦後博物誌」の時点ですでに確認できる。なお「戦後博物誌」では「思想兵の手記」が「朝鮮人居住区にて」の前に配置されていた。初出では八首あったもののうち二首が「戦後博物誌」の時点で削除され、同時に一首が新たに追加されている。

新たに加えられたのは掲出四首目である。連作の初出版には、この歌と内容的に対応するようなへしわの奥から俺の微笑をさぐつてくる視線にたえて歩む死者まで」という歌が存在した。¹⁵両者は共に「朝鮮人居住区」に立ち入る際の「俺」の心理を主題とするものだが、比較すると「俺」と「朝鮮人」とを介する「視線」が反転していることがわかる。初出では自らに向けられる「視線にたえ」ていた「俺」は、改稿によって「にんにく・牛の胃をうる灯」を見る位置へと移動している。

「老婆」の遺体を「(運命)の諺文」¹⁶との相同性によって認識し、さらに「(平壤で死にたかつたー)」と死者の声を「とじのこすうすい流浪の唇」から想像するというように、視覚的把握はこの連作の前半における特徴をなしており、作中主体はすでに見る者の位置をとっている。ただし遺体は能動的に「俺」へ「視線」を返す者ではなく、視診は「身構える」ような緊張を要しない。

見る／見られるという非対称な関係によって表象される両者の距離は、ここでは「朝鮮人居住区」と「日本」の構造的に非対称な関係がもたらす心理的距離でもあるが、見られる側から見る側へと「俺」の位置を移す操作は、そうした心理的距離について表象する場を、他者が「俺」に向ける「視線」から「俺」の内心へと移す操作でもある。内心といっても、住人に探るような「視線」を向けられるまさにその場面の心理から「朝鮮人居住区」に入る手前の心理に設定し直されていることには注意が必要であるうえ、「身構える」自らの身体への言及や「何故？」という疑問は、それだけでは内省として不十分かもしれないが、ここには「日本」と「朝鮮人居住区」の非対称性を、受動的にはなく引き受けようとする姿勢があるといっていだろう。

「俺」の内省を経て、連作前半で「視線」を介して表象されていた見る者と見られる者との間の距離は、掲出六首目では「おれたちに革命を売る同士陳よ」とダイアローグの形式をとることで無化される。「同士陳」なる人物についての詳細は不明だが、「こういうさりげない死」を見つめることで「革命」を相対化する視座が持ち込まれようとしている。七首目は、初出形(初出では新字)では「東京の裏戸口 その母國語の眞冬の朝のあふれゆく声」であった。「東京」の「朝鮮人居住区」から「日本」の「朝鮮人居住区」へと問題意識が拡張していることが確認できる。

こうした操作を施したうえで、日本のナシヨナリズムを擬人化した「ナシヨナリストの生誕」の直前にこの連作が配置されているということは配列主体の仕事を検討するうえで重要である。このことを前提に議論を進めたい。

三、配列主体・岡井隆の仕事

それでは冒頭からの配置はどのような流れを持っているのか。

本歌集の特徴として、この間の時事に取材した作品の多さを挙げるができるが、それは冒頭において早くも指摘できる。例えば巻頭連作「運河の声」では、一九五六年七月のナセル政権によるエジプトのスエズ運河国有化宣言に言及しており、続く連作「アジアの祈り」は第二次中東戦争、ハンガリー動乱に反応する作品を含んでいる。

巻頭連作「運河の声」四首は「未来」一九五六年一〇月号掲載の八首が再構成されたものだ。歌集版の四首は以下の通りである。

渤海のかなた瀕死の白鳥を呼び出しており電話口まで

緋のいろのアジアの起伏見つづくジープ助手臺に寒がりな

がら

肺野にて孤獨のメスをあやつるは〈運河國有宣言〉讀後

立ちあがる運河の聲に背をさらし爪切りちらしいる手術前

小池光は「ジープ」を進駐軍の象徴とし、その助手台を「アメリカに隷属する」日本の位置であると読んでいる。同時に「緋のいろのアジア」は「反植民地戦争、解放運動で流された尊い血をイメージする。また社会主義のレッドである」と東西陣営の緊張関係における日本の立場を踏まえて解釈した。⁽¹⁷⁾「緋のいろのアジアの起伏」や、アラブナショナリズムを象徴する「運河國有宣

言」に反応する一方で、かなたの「立ちあがる運河の聲」とは隔たった日本で医師としての勤めを持つことに「孤獨」を抱える主体像を歌集冒頭ですでに提示していることは、思想の脆弱性や、闘争への傍観者性が問題化されてきた作品群を歌集に収めるうえでのエクスキューズとして機能しうる。脈絡は他にも指摘されている。民族主義への反応は明らかに「ナシヨナリストの生誕」と連続しており、ここに現われるような医師の手術前の身振りは、例えば「天の炎」の〈旗は紅き小林^{おばやし}なして移れども帰りてをゆかな病む者の辺に〉を經由して、「勝ちて還れ」において自己言及的に反復されている。

これに続く連作「アジアの祈り」四首ではガザの死者やブダペストの市民として虚構化された「我」の姿が注目に値する。

満身に怒りの花を噴き咲かせガザ回廊に死んでいる我

ブダペスト市街に精悍の牡牛^{いづかい}率いて一塊のパン・水にありつく

妻連れて國連の喪にゆくときのアジア人^{いづかい}わがアジアの祈り

部屋に突つ立つとき一對の火の鳥を腹中^{はらうちゅう}ふかく羽ばたかせお

り

これらは出来事の渦中にいる市民に連帯する意思表示の一形態だと考えられるが、「思想兵の手記」で〈死ぬべきは我らならずやと問うときのいまだ戦闘を知らぬ唇〉〈市民兵に肩を並べてためらわずびかくる言葉持てりや妻よ〉といった、「市民兵」と軽々しく連帯しようとするに釘を刺すかのような作品における自己批評を機能させるために収められた作品であるとみるこ

とができる。ここに態度変更があるならば、自己批判の対象となるような作品は収録を見送られていてもおかしくはなかっただろう。編集操作によって思想の変遷を読み取るための道筋が整備されているのである。

連帯についてはむしろ、「妻」を「連れて」いることで「アジア人」としての主体が立ち上がるかのように書かれている三首目が特徴的である。「おれたちに革命を売る同士ドシム陳よ」というダイアログが、「俺」を「おれたち」へと拡張しているように、本歌集における連帯の回路は虚構化した「我」を遠隔地の出来事の渦中に送り込むことではなく、眼前の他者を介して成立するように表象されている。四首目で部屋にひとり「突っ立つ」とき「我」は「一對の火の鳥を腹中ふくちゅうふかく羽ばたかせ」ているが、これは「市民兵」や闘争の主体との連帯を希求する一方で現実から遊離できないことに引き裂かれている「我」の自画像である。この連作は「我」自身を他者化することの限界に伴って、「妻」を介して自己を「アジア人」として定義し、自らの祈りを「アジアの祈り」に連ねようとしているが、「アジア人」なる自己認識がおそらくは全く無効になる現場が「朝鮮人居住区にて」に描き込まれていることは先にみたとおりである。ここで問題となるのが、直接隣り合うことのできない「アジアの祈り」と「朝鮮人居住区にて」の間に位置している三首目の連作「ゴキブリの祭り」である。この配列によってどのようなコンテクストが構築されようとしているのか。そのことを考えるためには「ゴキブリ」がいかなるモチーフであるのかを明らかにする必要がある。

四、「ゴキブリ」とナシヨナリズム

以下は、「ゴキブリの祭り」五首である。

ゴキブリの祭りに招まねばるわれらかく生きる周到の理由もてりや
かぎりなく遠き暁へよごれつつ燃えつきてゆく奴の爪婢ひの爪
道あふれゆく小型車に 一瞬惑う〈道ひしひしとゆく戦車群〉

われらのためかつて日本に育たざる種子送られ来テラ・ロツサから

ゴキブリの祭りの終り地上の果一切を賭け肢闘あしえる

ここに「運河の声」、「アジアの祈り」のような時事に対する反応を即座に読み取ることとはできない。また、岡井自身の生活・経験を直截に記録しているわけでもない。さしあたり連作全体を寓喩的に解釈することが有効であるはずだが、それまでの流れに対して唐突に登場する「ゴキブリ」は喩としての解釈を阻む強烈な具体性を備えたモチーフでもある。「ゴキブリ」が媒介する意味は、内容のレベルだけではなく、配列のレベルでも検討されなければならない。連作の配置を問うことは、歌集の達成を示すことのみならず、歌集の成立背景について考えるうえでも大きな意義がある。歌集で「ゴキブリの祭り」としてまとめられた五首（初出…「未来」一九五七年七月号、初出では七首）は「作品3番」

として「戦後博物誌」に掲載されている。このプレテキストは歌集を編集する時点の岡井自身に丹念に再読されたと考えるのが自然である。歌集刊行三ヶ月前の一九六〇年一月に発表された連作「勝ちて還れ」の「2 城」における「ゴキブリ」のモチーフは、既に発表されていた「ゴキブリの祭り」と併せて歌集に収めることを意識して再利用されたものである可能性が高い。歌集における「ゴキブリ」の働きを探るために、この非常によく似た二篇を並置してみよう。

キチネットのうらにゴキブリの城成りて今夜われとわが妻招
ばれいる

ゴキブリは疊を進む彼ら尙ころざす地を持てる羨しさ
體液の鋭き線條をしたがえて逃れんとするゴキブリ光る

この國に生きがたき理由ゴキブリとともに殖えつつ、しば立
ちすくむ

永遠に夕映ゆるなき地中に天指す指が萌えそろう見ゆ

共通するのは「祭り」／「城」として表象された「ゴキブリ」の複数性の中に「われら」／「われと妻」というすでに複数化している主体が「招ば」れていることだ。「われらかく生きる周到の理由もてりや」という問いが「われら」と「彼ら」の差異を強調するようにこの構図は一見対立的だが、先に確認したような他者を介する連帯の回路は、ここに「われら」が「彼ら」に参入していく可能性を開いているともいえる。「招」の文字が負うニュアンスからは、少なくとも「ゴキブリ」が「われら」と敵対しよ

うとしてはいいことを読み取ることができる。

一方、後者の連作で「ゴキブリ」が「この國に生きがたき理由」とともに表象されていることは看過できない。両者が「殖えつつ」あることに對して原因の根絶を志向しない「しば立ちすくむ」という反応には「この國」におけるナシヨナリズムの困難さが露呈していると考えられる。「彼ら尙ころざす地を持てる羨しさ」とも書かれているように、「ゴキブリ」の存在感は一意に不快なものとして扱われているわけではない。しかし、「ゴキブリ」と「この國に生きがたき理由」は、「日本」の土壤が人間よりもむしろ「ゴキブリ」に適したものである可能性を示唆しながら分かつがたく結びついている。

前者の連作の（われらのためかつて日本に育たざる種子送られ來テラ・ロツサから）という歌は、そうした「日本」の土壤への間接的な言及である。「テラ・ロツサ」はイタリア語（terra rossa）で赤土を指す。主に地中海沿岸に分布する風化した石灰岩によって形成された土壤の名である。ここからその「種子」の原産地をヨーロッパとすれば、この歌は「種子」が「日本」の外部から持ち込まれたものであることを強調することで、「日本」の近代化が抱えた深刻な矛盾を問題化しようとしているようにみえる。西川長夫は「国粹」が翻訳語であるという事実そのものが示しているように、「国民国家」の形成自体は欧化であった」（『増補 國境の越え方』平凡社、二〇〇一年）と指摘したが、そのことを「日本」の土壤に自生しているものではなかった「種子」を「われらのため」にヨーロッパから輸入することで「日本」という枠組みが形成されたと読み替えれば、この「種子」こそナシヨナリ

ズムの謂いである。すると〈この国に生きがたき理由^{わけ}ゴキブリとともに殖えつつ、しばし立ちすくむ〉とは「この国」の根底的な不安定性に立ち返らざるを得ない「われら」の姿を描いていることになる。ただし、「ゴキブリ」は「種子」のように輸入されたものではない。ここに現れる「ゴキブリ」はこの国の事情に対して超越的に「日本」にしぶとく生き延びてきた者である。「われら」が「彼ら」に参入していく可能性を考えることは、ナシヨナリズムの矛盾に立ち返って「われら」が「立ちすくむ」ときに残された選択肢を考えることだ。

このように共通するモチーフを介して二つの連作を接続することで、連作「ゴキブリの祭り」が、「アジア人」として自己を定義しようとした「アジアの祈り」と、そうした自己認識の限界に直面して内省する「朝鮮人居住区にて」の間に位置していることの意味が明らかになる。〈おれたちに革命を売る同士^{ドシム}陳よこういうさりげない死から出直そう〉とあったが、ナシヨナリズムの矛盾に立ちすくみ、「アジア人」としても容易に連帯できない「われら」が「出直す」ための方法は「革命」ではない。「われら」も彼らのような「ゴキブリ」になることだ。「ゴキブリ」というモチーフはその場で即座に隠喩性を発揮するというよりも、「ゴキブリ」そのものとして配置され、歌集のコンテクストの中で動き回ることそのコンテクストを「ゴキブリ」化する特権的なシニフィアンとして機能する。二つの連作が歌集の冒頭と巻末に配置されることで「ゴキブリ」というモチーフは働き、そのコンテクストは歌集全体に波及している。

妹を呼びかえす聲父よりも鋭し日本の〈家〉の奥から（「思想兵の手記」）

さらに「ゴキブリ」の出現位置について述べるならば、「彼ら」の巢食っている場所である「キチネットのうら」が、文字通り「〈家〉の奥」であることはきわめて重要である。ここには帝国の縮図としての家父長制を「ゴキブリ」化するような読解が用意できる。

五、「ゴキブリ」化するための装置

家の内部うつすときフィルムごとくくらくく父母のけむれる目鼻（「暦表組曲」2 月曜日）
煮えくるう水を愛して夜半すぎし厨^{くりや}に居たりけり、怪しむな（「暦表組曲」8 日曜日）
そそりたつ家具の谷間に魔のごとく緋がひらきたり、そこ終着地（「室内旅行」）

建物としての家や部屋は歌集中で繰り返し描かれるが、「キチネットのうら」で繁殖する「ゴキブリ」の居場所を「家」の奥」と読み替えるとき、それは制度としての「〈家〉の奥」でもありうる。

「〈家〉」といえば、「ナシヨナリストの生誕」はとくに「2 父と母」で顕著に家族を主題としていたが、そこでは「ナシヨナ

リスト」の父は「黄大陸」だとされる一方、「母」は人間サイズで形象化される場合と、「弧をはりて立つ長身の母なる島」すなわち日本列島として描かれる場合があり、その姿が定まらない。

最もちかき黄大陸を父として俺は生れた朱に母を染め

延安に雌伏の兵をやしなわん長旅のおわり閨に入る父
抱かるときも佝屈 弧をはりて立つ長身の母なる島よ
母の背に兄の軍靴がうずめあり狂いて父に挑みて死にき

先行批評はそこに比喩の一貫性のなさを指摘してきたが、いずれにせよ「母」は常にその身体を表象されてきた。「3 胎内」の〈胎内のわが背に痣をのこすまで鞭うたれおり母は私服に〉という歌ではその身体が「ナシヨナリスト」と共有されてもいた。問題はむしろ「父」の身体性の希薄さだろう。以下の三首はいずれも「思想兵の手記」を構成する歌だが、こうした歌においても指摘できるように本歌集における「父」は著しい観念性を帯びている。

炎天にあかくいどる可動橋かかげて彼方父に對える

父よその背後はるかにあらわれてはげしく葡萄を踏む父祖の
群れ

ああ言葉あふれて止まぬ唇を覆わんとして父の手乾く

こうした観念的な「父」、あるいは血筋のなかに想像される「父祖の群れ」に分析の射程を伸ばすとき、「日本の〈家〉の奥」に

は、父系に連なる天皇制が設定できる。岡井は「曆表組曲」「3 火曜日」で〈天皇の居ぬ日本を唾ためて想う、朝刊読みちらしつつ〉と、「この国に生きがたき理由」とも関わるような書き方で、直接「天皇」に言及している。また、同じ連作の「6 金曜日」では皇室に関わる同時代のきわめて大きな出来事が作品化されている。

晝顔のごとき笑いが連なりて地を征けり祝婚のテレヴィにて

「祝婚のテレヴィ」が指すのは、一九五九年四月一〇日に行われ、全国にテレビ中継された皇太子結婚パレードである。ここで「連な」つているとされる「晝顔のごとき笑い」とは、画面を通じて増幅した皇太子と皇太子妃の「笑い」であるだろうし、それをこやかに受容した大衆の「笑い」でもあるだろう。

この一大イベントが同時代の大衆社会に与えた影響はもちろん大きい。週刊誌は皇太子妃ブームを作り上げた。

週刊誌に満載されるスターの離婚や性にまつわるスキャンダルが、恋愛結婚のいわば逸脱部分として、恋愛結婚イデオロギーを負の側面から補強したとすれば、皇太子の婚約から成婚を経て浩宮誕生にいたるまでのマスコミ報道は、当事者が意図すると否とにかかわらず、恋愛結婚イデオロギーをいわば正の側面から補強する機能を果たした。(井上輝子「マイホーム主義のシンボルとしての皇室」「思想の科学」、一九七八年六月号)

しかし、ここで再度思い起こしておくべきことは「この国に生きがたき理由」が「殖え」と書かれていたことだ。井上が指摘する「皇太子の結婚をつうじて、イエ制度の宗家から、恋愛結婚を介しての近代的ホームのモデルに見事な変貌をとげた」皇室は、メディアが供給するイメージによって大衆の準拠枠にはなつたかもしれないが、「イエ制度」そのものからは脱却していない。そこでは依然として血筋の再生産が欲望されているからだ。松下圭一は過熱したマスコミの報道について「ストリップ化しないかぎり、ニュースが、そしてゴシップがでてこない。(中略)皇太子妃の趣味、クセ、書体からヒップ九一・四センチ、バスト八一・六センチまで、一斉に暴露してしまった。これらのことは皇太子妃のスター価値を上昇させるために行われたのである」と述べているが、こうした報道が大衆に促した皇太子妃の身体への注目は、「浩宮誕生」への期待を煽つたものではなかったか。「結婚のテレビ」に「晝顔のごとき笑いが連な」る姿を見るとき、そこには同じ血筋に「連な」るべき、まだ生まれていない子孫までもが幻視されているといえる。そして、「家」と強固に結びつく血筋のイメージには、「ゴキブリ」が入り込む。おそらくは人間に潰されながら、まさにしぶとい抵抗力を発揮して這い逃げる「ゴキブリ」は「體液の鋭い線條をしたがえて」いたが、この表現を血筋の喩として読み替えれば、イデオロギーとしての「家」や血筋のイメージに「ゴキブリ」のコンテクストが合流する。

また、このイベントが「連なりて地を征けり」とまで書かれるとき、このパレードの描写は「ゴキブリは畳を進む彼ら尚こころざす地を持てる羨しさ」(體液の鋭き線條をしたがえて逃れんと

するゴキブリ光る)といった一方向に移動していく「ゴキブリ」の姿と重なっている。つまり、歌集がこれらの作品を同時に収めることで、皇太子と皇太子妃を乗せた馬車やそのパレードは「ゴキブリ」として文脈化される。

道に段なして二人を祝いたる嘗ての狂の今まざまざと
あらがね
鑛のごとき體がひしめきて饗祭せり 六月・日本

「勝ちて還れ」では「饗祭」という語を用いて安保闘争を表象することで、作中の現在に「結婚」を見物する群衆のイメージが引き込まれ、「狂」の文字によって群衆の文脈が一元化されている。ここには一九六〇年六月一日のデモ隊国会突入時に機動隊に殺された樺美智子と皇太子妃・正田美智子の二人の名の重なりも意識されているだろう。パレードの祝祭と、闘争の結果としての「饗祭」が重なるものとして表象されるとき、「ゴキブリの祭り」という連作タイトル機能はその二つの祭りが結び付く空間を作り出すことにある。「ゴキブリの祭り」と「勝ちて還れ」がモチーフの共有によって歌集に通路を開いていることで、多様な群衆が「ゴキブリ」の喩として文脈化されるのだ。

六、おわりに

本歌集に収録された作品のうち、雑誌初出時から注目を集めてきたいくつかの連作は文学的な強度・政治的な態度のそれぞれについて同時代にはきびしい批判が提出された。それに対する方法

論的反省としてその後の岡井は「私性」について盛んに論じ、一九七〇年から一九七五年にかけての失踪期間を経て、詩への接近、口語化、旧かなへの変更等スタイルにおいていくつかの変節を経験する。

第二歌集刊行時点の岡井の方法意識は、後のキャリアの展開から遡及的に位置づけられてきた。個々の連作についても、その思想性は岡井隆の表現史／個人史に回収されてしまう傾向にあった。

本論は、そうした先行批評が常に連作を自明視して蓄積してきたことで一冊の歌集としての編集意識が見落とされていることを指摘した。歌集は静的な短歌のコレクションでも、作者の成長とパラレルな連作のアーカイヴでもない。いつからいつまでの／どの作品を収集し、それをどのように並べ一冊として提示するかという内的要因としてのコンセプトとは別に、本歌集には塚本の『水銀傳説』との同時刊行という外的要因もあり、それが具体的にどのようなプロジェクトやキャンペーンで、どのように歌集編纂に作用したのかを明らかにすることは今後の課題であるとしても、収録される作品同士を相互に文脈化する装置としての歌集を検討することはきわめて重要である。本論においては主に「ナシヨナリストの生誕」「思想兵の手記」という発表当時に注目を集めた連作を収めるにあたって、複数のエクスキューズが行われていることを明らかにした。先行批評で取り上げられていた「侵略的ナシヨナリズムの問題」への取り組みについてはその限界が配列によって自己批評的に設定されているとみることが出来る。

また、本論が試みたような配列論を軸とする歌集論は、ときに

作者の意図とは別のレベルで働いているイメージのネットワークを明らかにすることでもあり、従来の歌人論的蓄積を乗り越える可能性を持っている。そこで問題となる「ゴキブリ」は歌集前半の流れのなかで異物であり、巻末の「勝ちて還れ」とモチーフを共有することで歌集全体に対して強力に働きかけていた。

あらかじめ「ゴキブリ」が何かの喩なのではなく、別のモチーフが「ゴキブリ」の喩に転化していくという歌集の構造は、別のレベルでも現れている。これまでの議論を踏まえることで、たとえば、連作「詩人の首」の〈何ものかが先くぐりして死んでいるリノリウムのうえ羽根こわばらせ〉という歌で死んでいる「何ものか」や、連作「死について」の〈クレエ展のため黒衣もて装えり漸くわれらにも退路なき〉において「黒衣」で装う「われら」の姿には「ゴキブリ」の気配を感じ取ることができる。

土ながら落えらばれて曙の厨に茂り……快々と妻（詩人の首）

〈否！〉なぜ？〈何故つて……〉かさね置く手袋の雪融けながら湖なす卓は（私をめぐる輪舞）

家に婦待つこと一瞬を昏め過ぎ、……しずかに膿を吐く腫瘤あり（私をめぐる輪舞）

世間とは……、長いものには……、地頭には……、さらば穏和なる七曜あらん（暦表組曲）「1 序」

キシヲタオ……し、その後に来んもの思へば夏曙の erectio penis（勝ちて還れ）「4 儀祭」

そのように考えるとき、例えばこれらの口ごもるような歌が連ねている三点リーダーは、具象化された「ゴキブリ」そのものとしてみえてくる。「キシヲタオ……し」という有名な一首は、従来盛んに議論され、とくに下句の「夏曙^{あけぼの}の erectio penis」は「男と女の果てしないくさのようなものがこの世の果てまで続くだけだ」「キシヲタオセ」のスローガンも、勃起してすぐに萎える朝のベニスのようなものだ⁽²⁶⁾などと解釈されてきた。いずれも闘争に熱狂する群衆への不信心や孤絶感を主題とする読解だが、本論の解釈は異なる。この歌はスローガンを中断して「そののち」に向かう思考のうちに「ゴキブリ」を走らせており、ここには革命とは異なるオルタナティブな抵抗のエネルギーが宿っている。

本歌集は革命のスローガンを「ゴキブリ」化し、ナシヨナリズムや皇室を「ゴキブリ」化し、パレードに群がる民衆を「ゴキブリ」化し、「われら」と「朝鮮人」を「ゴキブリ」化しうる構造を持っている。「ゴキブリ」とは、文字通りのゴキブリであるとするとき、「彼ら」の生に組織性や目的性、「かく生きる周到の理由」はない。権力構造や、大衆の運動の中にあっても、ひとつの目的に向かつて組織化し動員しようとする権力に、しぶとく抵抗することが「ゴキブリ」になることであり、権力を「ゴキブリ」化することだ。

注

- (1) 村上一郎「短歌の精神」『岡井隆歌集』に寄す（『現代詩手帖』一九七二年一月号）、佐佐木幸綱「岡井隆ノート」（『短歌』一九七二年一月号）など。

- (2) 山田富士郎「燃え易き耳、時間の耳」（『短歌』二〇〇二年七月号）
- (3) 歌集「あとがき」
- (4) 江田浩司「前衛短歌論新攷」（現代短歌社、二〇二二年）
- (5) 二〇首以上の連作は「ナシヨナリストの生誕」三二首、「思想兵の手記」四八首、「私をめぐる輪舞」三四首、「土地よ、痛みを負え」三〇首、「暦表組曲」九二首、「勝ちて還れ」三二首、「天の炎」二五首の七篇。
- (6) 江田、前掲。
- (7) 小池光「岡井隆〈鑑賞・現代短歌10〉」本阿弥書店、一九九七年
- (8) 菱川善夫「〈新世代の旗手・5〉岡井隆」（『短歌研究』一九五八年五月号）
- (9) 黒住嘉輝「岡井隆論——惨たる栄光——」（『短歌』一九六〇年一月号）
- (10) たとえば、「勝ちて還れ」は初出から大きく再構成されており、連作内部が新たに付された四つの小題によって分割された。
- (11) 4 饗祭 内の〈ブラカードの鼻曲がり成形したきかな夏蝶の翅自在に埋め〉は歌集初出。そのほか改作されている歌がある。
- (12) 黒住の「やや弱い」という批判は具体性を欠くが、「朝鮮人居住区にて」が「ナシヨナリストの生誕」に付された露骨なエクスキューズであること自体に向いているとも考えられる。
- (13) 吉本隆明「岡井隆歌集『土地よ、痛みを負え』を読んで」（『未来』一九六一年五月号）、北川透「〈原風土〉への愛と背反」（『現代歌人文庫②岡井隆歌集』国文社、一九七七年）。
- (14) 「短歌」一九五八年一月号に発表された事実上の誌上歌集である自薦百首「戦後博物誌」は本歌集前半部のプレテクストだ。冒頭の「運河の聲」「アジアの祈り」（ここの小題は「作品

1番「作品2番」は、タイトル以外にはほとんど異同がなく、歌集前半の流れはこの時点である程度固まっていることが伺える。歌集における大きな変更点は「思想兵の手記」と「ゴキブリの祭り」の配置である。

(14) 岡井自身のセルフイメージの利用はパラテキストのレベルでも指摘でき、初刊単行本『土地よ、痛みを負え』扉には手術着にマスク姿の岡井隆本人の写真が使用されている。

(15) 初出版から削除されたもう一首は〈濛々としてその肺野^{はいや}列島の底の底から四季わく霧に〉。ほかに歌集版三首目の上句は初出では「高い腹部の内ふかくいま腐りきる」。

(16) 「平壤で死にたかつたー」と想像される死者の声も初出では感嘆符がなく、印象が異なる。

(17) 小池、前掲。

(18) 「招ば」れるという構図によって「ゴキブリの祭り」は「朝鮮人居住区にて」における死亡確認の場面と結びつく。

(19) この歌の叙述は「日本」に育たない「種子」であるということと、その「種子」が送られてくるということはいずれも「かつて」という過去の時制に属するの、それとも過去に日本には育たなかった（自生していなかった）「種子」が現在送られてきたということなのかの区別を要する。本論では一首内の語の配列を重視し、後者の解釈をとっている。また、「テラ・ロッサ」の解釈についても、より戦略的に赤土ならぬ赤い／土、すなわち、革命思想の「種子」を育むことのできる土壤という意味を取り出し、一首を別の土壤との対比において革命思想の発芽・成長に適さない土壤＝「日本」とすることも可能である。ただし、歌集全体でこれを考えるとき、必ずしも「赤」は社会主義や解放運動に限定できない。むしろそうした革命のイメージを借用してオルタナティブな（土地への）想像力を喚起する色として配置されている

ることには留意するべきだろう。

(20) 〈ヨオロッパより百年を後れつつ臆説ひとつ蘇らしむ〉（土地よ、痛みを負え）等の歌もこの文脈を支える。

(21) 一九五九年四月一〇日は金曜日であり、「暦表組曲」の「6金曜日」と対応している。

(22) 岡井は「疾風の喪」（「短歌研究」一九五七年七月号）で、皇太子成婚パレードに批判的に言及している。

(23) 松下圭一「大衆天皇制論」「中央公論」（一九五九年四月号）

(24) 第一歌集「斉唱」において〈鬚垂れて敏きゴキブリおのずからわれの目覚めん夜明けまで居よ〉（「二つの世界」）（20）、第三歌集『朝狩』において〈飴いろの翅を重ねて地をすべるゴキブリを刃のごとく怖るる〉（「ガザ遊園」）と、岡井が継続して「ゴキブリ」という歌語を用いていることは今後検討すべき課題である。

(25) 小池、前掲。

(26) 篠弘、馬場あき子、佐々木幸綱監修『現代短歌大事典』（三省堂、二〇〇〇年）「岡井隆」（項目執筆者…三枝昂之）。

※本稿において特に注記のない引用はすべて岡井隆『土地よ、痛みを負え』（白玉書房、一九六一年）に拠る。引用した短歌作品と連作タイトルの漢字・仮名遣い・ルビは初刊の形態を保持し、散文は旧字を新字に改めた。また短歌作品を本文中に引用する場合には〈 〉を引用符として用いた。

（せぐち まさし 本学大学院博士後期課程）